

# 大学教育改革フォーラム in 東海 2015 におけるポスターセッションに参加して

—短期大学における教育効果の可視化とキャリア意識の影響—

上原 正子・中島 和成・大塚 知津子

愛知みずほ大学短期大学部

## 1 概要・主旨

「大学教育改革フォーラム in 東海 2015」は 2015 年 3 月 7 日（土）、名古屋大学高等教育研究センターの主催により名古屋大学東山キャンパスにおいて大学関係者を対象に開催された。

本フォーラムは大学教育改善のために何をすべきかを率直に語り合う場であり、主催者あいさつの中では「大学教育の改革・改善をめぐる動きは以前からみられたものの、近年は従来にもまして活発になっている……とくに重視すべきは、大学教育の目的です。大学教育は誰のために、何のために存在するかという問いの解答は多様であります。結局のところ、誰のためかといえば学生のためと思われまふ。彼らに質の高い学びの機会を提供すること、それを通じて彼らの精神的発達を支援し促すこと、明日の社会を担う主体たる彼らに使命遂行に必要な能力や資質を備えさせることが目的ではないでしょうか。現在の高等教育機関で働くわれわれ教職員には、それを実現する責任が課せられています……」と述べている。

## 2 基調講演

講演者：追手門学院大学副学長 秦敬治

演題：大学教育改革を進めるために必要なものとは  
内容：大学教育改革を進める上で必要な視点とはなにか（最近では、教学 IR に対し多大な期待がされているが、一方では①その手法が定まっていない、②エビデンスの質が高くない、③目標や目標値の不明確さ、④教育の本質と教学 IR は一致するのかが等、課題も多い。このような中で、大学の存在意義と教育理念や目標の設定は重要である）その他、大学教育改革を行うとはどういうことか。何を達成すれば、現在叫ばれている大学教育改革といえるのか、大学教育改革のためのリーダーとリーダーシップ、大学教育改革と教員、職員、学生のかかわり方等について示唆があった。

## 3 ポスターセッション

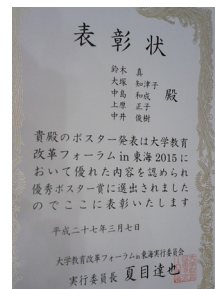
ポスターセッションには 26 の参加があった。本学は鈴木真（南山大学）先生、中井俊樹（名古屋大学）先生のご協力を得て「短期大学における教育効果の可視化とキャリア意識の影響」を示した。

研究概要として「教育効果があるのか、何がそれを左右するのか」ということは、大学教育において重大な関心事である。特に 2 年しか教育期間がない短期大学では、いかに効率的に学習成果をあげるかということ

が重要である。本研究では、愛知みずほ大学短期大学部における学習到達テストの時系列データと、1 年次 10 月にとられたキャリア意識の調査を基に、教育効果の推移を可視化し、キャリア意識形成の影響を検討する。到達度は入学時よりも卒業時の方が向上しており、2 年間の学習成果が確認される。基礎的知識と専門的知識の 2 つのカテゴリーに分けると、特に専門的知識の教育効果が高い。とりわけ 1 年次の学習の成果が現れる。キャリア意識が高い程卒業時の到達度が高いという傾向がある。また、入学時の基礎的知識も卒業時の到達度の一部を説明する。なお、退学のリスクは、入学時の基礎的知識の点数が低くともキャリア意識が高ければ小さいようにみえる。」とし、次ページのポスターを作成し公開討議を行った。このポスターセッションは参加者の投票により、優秀ポスター賞を選ぶことになっており、本ポスターは優秀ポスターに選ばれた。

## 4 オーラルセッション

オーラルセッションⅡの B 会場では「組織に着目した教務の実践的知識の積み上げとその継承」をテーマとして、小野勝士（龍谷大学）が『「大学教員免許業務 Q&A」を活用した実践知の共有と課題』を、宮林常崇（首都大学東京）が「公立大学法人特性を生かした教務事務における実践知の共有」を、上西浩司（豊橋技術科学大学）が「教務系業務における実践的知識の共有と継承」の報告があり、村瀬隆彦（愛知みずほ大学）を座長として進められた。その他 7 つのブースにおいて報告があり、議論が深められた。



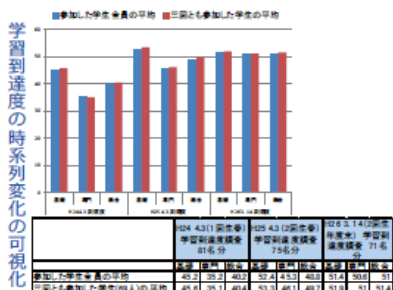
大学教育改革フォーラム in 東海  
2015/03/07

### 短期大学における教育効果の可視化 とキャリア意識の影響

鈴木 貴 岡山大学社会情報研究所  
大嶋 和博子 愛知みずほ大学短期大学部生活学科  
中嶋 和忠 愛知みずほ大学短期大学部生活学科  
上野 基伸 愛知みずほ大学短期大学部生活学科  
中井 俊樹 名古屋大学教育研究センター

#### 1. 教育効果の推移の可視化

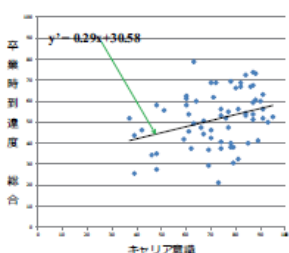
- 学習到達度調査は以下の三回行われた
  - ・ H24.4.3 (1回生春：入学直後)
  - ・ H25.4.3 (2回生春)
  - ・ H26.3.14 (2回生年度末：卒業直前)
- 学習到達度は、基礎的教養に関する全学生共通の項目と、専攻によって異なる項目についての、問題への重みづけされた正当率によって測られる



#### 2. キャリア意識が教育効果にもつ影響

- 就職レディネス・チェック
  - ・ 就職レディネス・チェック開発委員会（監修：渡辺三枝子、松本純平）によって作成された、自己採点用の質問紙調査
- 「キャリア意識」を5つのポイントの点数で測る
  - ・ (1) 就職意欲度、(2) キャリアプラン設定度、(3) 環境理解度、(4) 就職活動理解度、(5) 思い込みからの自由度
  - ・ 各20点で、合計100点満点
- 1年生の10月にこの調査を行った

卒業時到達度 総合 の予測



#### 考察

- 「就職意識効果」仮説は一応検証された。しかし、
- H26.3.14の学習到達度の「基礎」は、キャリア意識によって説明されない
  - ・ キャリアと基礎的知識の関係が学生には不透明だからだろうか
- 学習到達度の変化（卒業時－入学時）も、キャリア意識によっては説明されない

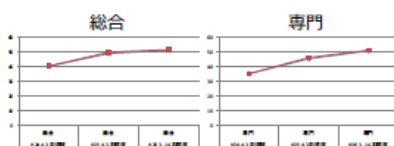
#### 研究の動機と目的

- 教育効果があるのか、何がそれを左右するのかということ、大学教育において重大な関心である。特に二年しか教育期間がない短期大学では、いかに効率的に学習成果をあげるかということが重要である。
- 本研究の目的は、名古屋市都市部の短期大学部を例にとりて、教育効果の推移を可視化し、キャリア意識形成の影響を検討することである。

#### 基礎、専門、総合

- 本研究では、基礎に関する学習到達度を「基礎(的知識)」の指標と考え、「専攻」に関する学習到達度を「専門(的知識)」の指標とみなす
  - ・ 「基礎(的知識)」：国語20点満点、英語10点満点、数学10点満点、社会15点満点、一般教養25点満点、計80点満点。100点満点換算にするために、各人の総合点を1.25倍している。
  - ・ 「専門(的知識)」：「専攻」20点満点。100点満点換算にするために、各人の総合点を5倍している。
  - ・ 「総合」：「基礎(的知識)」と「専門(的知識)」の点数を足して、2で割って100点満点換算にしたもの。

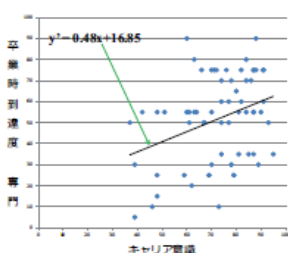
#### 学習到達度の時系列変化の可視化



#### 仮説と検証方法

- 「就職意識効果」仮説：1年次のキャリア意識が高い学生ほど、教育効果が高い
  - ・ 特に、専門教育においてこの影響が出る
- 検証方法：回帰分析
  - ・ データに欠損や異常のある17名を除外：66名のデータを解析
- H26.3.14 (2回生年度末：卒業直前)の学習到達度がH25.10のキャリア意識によって予測できるかどうかを検討

卒業時到達度 専門 の予測



- 入学時の学習到達度のうち、「総合」と「基礎」も卒業時の学習到達度（総合）の一部を説明する（それぞれ、 $p < 0.01$ ）。
  - ・ 「総合」より「基礎」の説明力の方が高い
    - ・ 総合  $R^2 = 0.145$ , 基礎  $R^2 = 0.274$
  - ・ 「専門」は卒業時の学習到達度（総合）を説明しない
- キャリア意識と入学時の学習到達度（基礎）を投入して卒業時の到達度（総合）を予測しようとしても、その重回帰モデルの当てはまりはあまり高くない ( $R^2 = 0.314 < 0.5$ )
  - ・ 学習到達度には、今回調べられていない様々な潜在的要因が影響していると思われる

- 調査対象：愛知みずほ大学短期大学部 平成24年4月入学（平成26年3月卒業見込であった）学生83名
- 主として使用したデータ
  - ・ 学習到達度調査の結果の時系列データ
  - ・ 平成24年（1年次）10月に行われた就職レディネス・チェックの結果

#### 統計分析とその結果

- 三回とも到達度調査に参加した学生69名に関して、参加者内一要因（三水準）の分散分析を、「基礎」「専門」「総合」のそれぞれについて行ったところ、すべてにおいてデータが採られた時期によって有意な差があることが確認された（すべて  $p < 0.001$ ）
- ただし、効果量は控えめ
  - ・ 「基礎」  $\eta^2 = 0.06$  ( $F(2, 136) = 13.30$ )
  - ・ 「専門」  $\eta^2 = 0.09$  ( $F(2, 136) = 13.73$ )
  - ・ 「総合」  $\eta^2 = 0.11$  ( $F(2, 136) = 22.32$ )
- 検定を行うと、どれも1年次から2年次には有意な差 ( $p < 0.01$ ) があるが、2年次から3年次末には「専門」で伸びに有意傾向があるだけ（片側検定で  $p = 0.53$ ）

#### 考察

- 全体的に知識面で向上している
- 一年時の伸びが著しい（「総合」で9点くらい上昇）が、「専門」は2年目も向上しているといえそう
- 三回とも学習到達度調査に参加した学生の集団の平均も向上しているの、単に成績の悪い学生が調査に参加しなかったために到達度の平均が上がっている訳ではないことがわかる
  - 在学中に真の教育効果が出ている

#### 結果

- H26.3.14の学習到達度の「総合」と「専門」は、キャリア意識によってそれぞれ部分的に説明される
  - ・ 総合：  $t = 2.759, p = 0.008$
  - ・ 専門：  $t = 2.888, p = 0.005$
  - ・ ただし、説明力（単回帰モデルの当てはまり）は高くない
    - 総合  $R^2 = 0.106 < 0.5$
    - 専門  $R^2 = 0.115 < 0.5$

#### キャリア意識、到達度の伸び、退学のリスク

- なお、キャリア意識高群では、全員の学習到達度の変化（卒業時－入学時）がプラスであった
  - ・ キャリア意識高群：キャリア意識がその算術平均 ( $M = 73$ ) より1SD ( $\sigma = 15$ ) と同じかそれ以上高い学生8人
- また、就職レディネス・チェック調査が1年次10月に行われた際に参加した学生は、1人しか退学していない
- 他の退学者（6名）はいずれも「キャリア意識」調査に参加していない

#### 方法論的意義と将来の課題

- 【方法1】データを統計的に要約し図表化することにより、教育効果を確認できた⇒可視化の重要性
- 【方法2】本研究は、就職レディネス・チェックという、学習到達度調査とは別の部署が行っているデータを学籍番号で結びつけることで可能になった⇒ひもつけ連結の意義
- 【課題1】知識に関する到達度調査だけでなく、新データ（自己評価シート）も合わせた可視化
  - ・ 学内外実習・実験を中心とする2年次の伸びについては、自己評価シートで測る試みを導入中
- 【課題2】プロセスデータもとって分析に組み込む
  - ・ キャリア意識が到達度につながる経路で関連するが、どのような介入が到達度を改善するのか、